

学道一如

発行
小樽双葉高校
生徒会通信
2025年6月13日
第14号

高文連支部写真展 倶知安で 江村蛭汰くん「水中の石華鏡」が入選

5月30日、倶知安で高文連後志支部写真展・研究大会（春）が開催された。本校から13名の生徒が参加し、作品鑑賞や写真撮影を行った。7校から86名が参加、170の作品が展示される中で、江村蛭汰くんの「水中の石華鏡」が入選作品（9点）に選ばれた。残雪の羊蹄山を背景に満開の芝桜にシャッターを切る姿があちこちで見られた。



好天に恵まれ、野外撮影を楽しんだ。



各校紹介のスライド



芝桜の撮影に挑戦

多喜二祭

没後92年 記念のつどい

映画「小林多喜二」上映

記念講演「北海道の心臓」の鼓動
市立小樽文学館長 亀井志乃氏

プロレタリア作家の愛と青春 短い生涯を描いた映画「小林多喜二」

今井正監督（一九七四年）
出演・山本圭 中野良子 北林谷栄 佐藤オリエ

【あらすじ】小林多喜二は、一九〇三年（明治36年）秋田の貧しい農家に生まれ、彼が四歳の時、一家は伯父のいる北海道小樽に移住した。伯父のパン工場働きながら彼は、小樽商業か



文学に命を賭けた多喜二の生涯を描いた作品。

ら高商（商大）へと学んだ。一九二四年（大正13年）北海道拓殖銀行に勤めた多喜二は、帳簿をつける合間に小説を書いていった。二十一歳の年の暮、「やまき屋」で美人の酌婦、田口タキを知った。貧乏ゆえに身を売らねばならなかった十七歳のタキを、彼は愛したばかりでなく、友人から借金して、彼女をわが家にひきとった。数日間、タキは多喜二一家のあたたかい笑いつつまわっていたが、突然、多喜二の深い愛から逃げるように去っていった。大正から昭和にかけてのこの時期は、日本軍国主義の抬頭期であり、治安維持法（一九二五年四月）が制定された。各地で抵抗運動が組織され、時代の鼓動は多喜二の胸を激しくうった。そして、タキへの思慕に苦しみながらも彼は文学にうちこみ、同時に労働者、農民闘争に参加した。一九二八年（昭和3年）一月、初の普通選挙がおこなわれた。多喜二は労働党山本懸蔵候補の応援遊説隊に加わった。山懸は落選したが、京都で初の無産政党代表山本宜治代議士が誕生した。全国

無産者芸術連盟（ナツプ）小樽支部幹事となっていた多喜二は、上京して理論的指導者・蔵原惟人と会った。二十四歳の多喜二にとつて蔵原との出会いは大きな励ましとなり、小樽に帰るや「一九二八年三月十五日」を書きあげた。この作品によって多喜二は名実ともにプロレタリア作家となった。その後、「蟹工船」「不在地主」……と発表した彼は銀行を解雇された。「不在地主」が拓銀のあくどい収奪をあばいたという理由だった。一九三〇年（昭和5年）多喜二は上京し、積極的に活動した。治安維持法で豊玉刑務所に収容された時、タキが面会にきた。美容師になろうとタキも上京していたのである。そんな彼女を多喜二は、出獄してから励ますのだった。翌三十一年、作家同盟書記長となった多喜二は、寝食を忘れて活動し、秋、日本共産党に入党した。この年勃発した満州事変をきっかけに、弾圧はいっそう厳しくなっていた。そのような状況の中で「党生活者」「地区の人びと」などを発表する多喜二を、警察は「見つけたら殺す」を合言葉に必死になって捜索した。同志の計らいで多喜二が数年ぶりに弟・三吾と日比谷公会堂で会った三ヵ月後の一九三三年二月二十日彼は逮捕され、その日のうちに拷問にかけられ虐殺された。警察は「心臓マヒ」と発表し、病院は解剖を拒んだ。弾圧の中でおこなわれた葬儀の日、蔵原惟人、壺井栄ら獄中の同志たちに一輪の花が届けられた。それは、明日の時代を信じて闘った多喜二を象徴するようにふさわしく、真紅に輝いていた。

（映画COMより）

昭和初期の社会矛盾、 人々の苦悩描く

記念講演「北海道の心臓」の鼓動

—多喜二が居た頃の—

市立小樽文学館長 亀井志乃氏



記念講演の中で、多喜二（25歳）の貴重な写真を紹介。

映画ひとくちメモ

治安維持法 1925年5月12日施行。「国体」（天皇中心の国家体制）の変革や私有財産制度の否認を目的とする結社、団体などを処罰した。共産党が標的だが、二度の改正で穏健な政治活動、文化活動まで取り締まった。敗戦後の45年10月に廃止。拷問や虐殺の犠牲者を多数出した。警察・検察の公式統計では検挙数は国内約7万人、国外・植民地を含めると約10万人。同法名目で検挙された全体数は50万人との指摘もある。

特別高等警察（特高警察） 日本の秘密警察。天皇暗殺計画の嫌疑を巡る大逆事件をきっかけに、無政府主義者、共産主義者ら反政府勢力を内偵、取り締まる組織として1911年、警視庁に初めて設置。28年までに全国に展開した。治安維持法を根拠に思想や言論、政治活動を弾圧した。45年10月、廃止された。

今井正監督のこだわり

映画の中で特高警察の拷問シーンが強烈な印象を与える。なぜか。今井正監督自身、多喜二と同時代に特高に検挙され、東大を退学している。権力の横暴を暴くことへのこだわりがあったと思われる。

映画の中で、権力者側は多喜二の文学者としての影響力を恐れ、死に至らしめた。だが、彼が頭だけでなく、身体を、命を賭けて書いた作品は永遠に生きて、人々に語りかける。

小樽市は今年度、日本

遺産に認定された。キャッ

チフリーズにある「北海

道の『心臓』と呼ばれた

まち・小樽」は多喜二の

エッセイから引用したもの

のだ。亀井志乃氏は多喜

二の数作品を引用して当

時の小樽と多喜二の作風

を解説した。

その1 「北海道の心臓」

人口十五六万の、街並

が山腹に階段状に這ひ上

がった港町で、広大な北海道の奥

地から集まつてきた物産が、そこ

から又内地へ出て行く謂は、

「北海道の心臓」みたいな都会である。

（1932年『故里の顔』より）

小樽は道内で港・鉄道が最も早く開設され、物流の拠点となっていたが、また労働者の街でもあり、時代の波のリトマス紙のように労働運動が活発に起こっていることが記されている。

その2 小樽を生き生きと

コール・ピーヤー（高架栈橋）

の勾配を、バッシューバッシューと白い蒸気の輪を吐きながら、小さい

古い型の機関車がオテセ（大型鉄製石炭車）を引いて行く。それが

小さく見えた。コール・ピーヤー

にはどんな汽船でもそのまま横付

けになった。そのジョウロから

汽船のダンブルに石炭をズリ落と

す音は、海を伝って栈橋のところ

まで聞こえて来る。（1931年

『転形期の人々』より）

映画のように動きがあり、音

が伝わってくる描写である。本

州へ、樺太へと石炭を輸送する

様はまさに心臓のようだ。

また、多喜二と同様に主人公

の龍吉は製パン工場で働きなが

ら学校へ通う苦学生だ。パンの

生産工程の苦労がリアルに伝わ

ってくる。

その3 北海製罐の工場

職場の片隅に取付けてある十馬

力の発動機は絶え間なく陰鬱な唸

りをたてながら、眼に見えない程

足場をゆすつていた。停電に備え

るガソリン・エンジンがすぐ側に

据え付けられている。―そこは工

場の心臓だった。そこから幹線動

脈のように、調帯が職場の天井に

渡っている主動軸の滑車にかかっ

ていた。そして、それがそこを基

点として更にそれぞれの機械に各々

ちがった幅のベルトでつながって

いた。そのまが人間の動脈網を

思わせる。（1930年『工場細

胞』より）

精妙に組み合わさった生産ラ

イン、極限まで合理化され、流

れ作業で容赦なく働かされる。

工場の合理化により、失業の憂

き目に遭う労働者も多かった。

その4 炭鉱労働者の重み

石炭はあらゆる産業を動かす謂

わば「血液」みたいなものだ。若し

も北海道の大きな炭鉱三つが、そ

の仕事をピタリと止めることがあ

るとしたら、全日本の工場がその

まま機械をとめてしまうことを意

味していた。（1932年『沼尻

村』より）

炭鉱労働者がストライキをす

ることがどんなに大きな影響を

与えるかがわかる表現だ。

【まとめ】

社会は生き物のような有機体

亀井氏は多喜二の作品は、ハー

バート・

スペンサー

の社会有

機体説、

シエルビ

ンスキー

のフラク

タル構造

（小さな

部分と大

きな全体

が似ている、右図）を想起させ

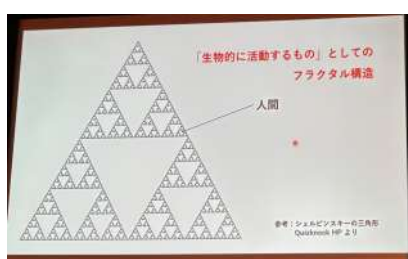
ると指摘した。

小さなものを観察すると大き

な世界が見えてくる―多喜二の

作品の普遍性はそこにあるのか

もしれない。



【取材を終えて】

映画と講演を通して、多喜二の生涯と作品について、また、多喜二の生きた時代について多くのことを学び、考えさせられました。（落合優翔）